一豊の妻

永井路子

一豊の妻

永井路子

読売新聞社

永井路子（ながいみちこ）
一豊の妻（かずとよのつま）

昭和四十七年二月二十五日　第一刷

発行者　二宮信親
発行所　読売新聞社
東京都中央区銀座三の二の一〒104
大阪市北区野崎町七七〒530
北九州市小倉区明和町一の一一〒802
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　協和製本株式会社
定価　六五〇円

©, Michiko Nagai, 1972

0093—700920—8715

一豊の妻　目　次

御秘蔵さま物語　7
お江さま屏風　53
お菊さま　87
あたしとむじなたち　117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

熊御前さまの嫁　155
一豊の妻　185
あとがき　267

装丁　柳生悦子

一豊の妻

御秘蔵さま物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

少女は耐えていた。

きゅっと閉じられたまぶたが、ときどきぴくりとふるえると、作りもののように長いまつげの翳が、あどけなさを残す頬にゆれた。苦痛がきわまり、もう幼いからだには、耐えきれそうもなくなったとき、しかしその表情は、ふいに恍惚にかわった。

花がひらくほとかすかにあけられた小さな唇から、聞きとれぬほどの吐息をもらしながら、二度、三度、眼をとじたまま、ゆっくり首を振った。

「そなた、もう、みごとに女じゃ」

家康は、ゆっくりからだを離しながらそう言った。自分のからだの下で少女のしめした反応に、彼はすっかり満足しているようだった。

五十に手の届きそうな、家康のからだが退いたとき、少女のからだの未熟さは、いっそうむきだしになった。かぼそい腕、盛りあがりを見せはじめたばかりの乳房、十三という年よりさらに幼げなからだに、さすがに、いじらしさを感じたのか、

「つらかったか」
珍しく家康は、やさしい声を出した。
少女は、やっと眼をあけた。長いまつげにふちどられた瞳は青く澄んでいて、はじめは何を言われたのかわからない、というふうに、まじまじと家康をみつめていたが、やがて恥じらうような笑みをにじませた。
「そのまま、やすんでいていいぞ」
家康にしても、自分の娘、というよりは孫に近い少女としとねをともにしたのは、はじめてだった。その後ろめたさもあって、ますます猫なで声になってその頬にさわり、やがて、いびきをかきはじめた。
家康の相手にした女は、どういうものか、人妻や後家が多い。が、今夜の少女、お八は正真正銘の生娘である。
——あのいたいたしいまでの恥じらいぶりはどうだ。そのお八に、俺は一夜のうちに別の世界を教えてやったのだからな……。
しぜん、そのいびきも高くなろうというものである。夢の中のお八は、より軽やかに、蝶のように彼にまつわりついた。彼自身も青年にもどって、お八を追いかける。お八はますます大胆になり、よろこびの声をあげた……。
家康が、そんな太平楽な夢を見ているころ、お八はそっと臥所をしのび出ていた。はじめは、つま

さき立ちして、しとやかに歩いていたが、しだいに、すたすたと男の子のような足どりになって、自分の局に入るなり、帯や着物をぬぎちらすと、双手をあげて大きなのびをした。

——なんて大きないびき！　あれじゃ、そのままやすめって言ったって、寝られやしない。

ぬぎすてたものを手早く始末すると、けろりとした顔で大あくびをし、寝床にもぐりこんだと思ったら、もうすやすやと寝息をたてていた。

どうやら、家康は、ちょっとばかり思いちがいをしていたようである。はじめて知った女のよろこびに、おそれ、恥じらい、とまどうお八——というのは、彼が勝手に描いた幻想であって、その経験は、彼女のからだに、判を押したほどのあとさえとどめなかったのである。

十三という年よりも幼い彼女の肉体は、そのことに何の興味も感じなかったのだ。

が、家康に召されるということの意味だけは、知りすぎるほど知っていた。

——この機をしくじってはいけない。

少女に似あわぬ打算が作らせた微笑を、恍惚の表情と読みちがえたのは、家康があまりに女を知りすぎていたために、かえって自ら落とし穴におちたというべきであろう。それにしても、なにげない表情が、そのまま人をとろかす媚態に見えたあたりに、お八の天性はのぞいていたかもしれないのだが……。

当のお八は、しかしそのことには気づいていない。

——ああ、これで大丈夫。

今までの貧乏ぐらしからはぬけだせると、子供っぽく、一心にそのことばかり考えていた。

なにしろ、長い間の浪人ぐらしのつらさは身にしみていた。十三という年にしては胸も薄く、腰のくびれの浅いのも、つまりはその貧しさのさせる業でもあった。家康につかえはじめたそのときは、

「当家は、そもそも、太田道灌の子孫でございまして……」

ふれこみだけは、ごたいそうなものだったが、そのじつ、太田家は貧窮のどん底にあった。道灌の横死後、この家は、運というものから、まったく見放されていた。

そのころ関東では、俄に北条早雲が擡頭して来ていたが、道灌の子孫たちは、この一世の風雲児に対して、次々とへまな取り組み方をしたのである。

まず道灌の子、康資は、北条の敵三浦義同と組んで戦死。その子資高は、北条側に寝返って一時的には祖父道灌ゆかりの江戸の地にもどることができたが、その子康資のときにがらにない謀叛気を起こしたため、北条軍に追われ、安房に逃げこんで窮死した。この康資が、お八の父なのである。

父が死んだとき、お八はたったの四歳だった。貯えも底をついていたし、その生活は、乞食同然だったといってよい。やっと兄の重正がつてを求めて佐竹義重に仕えたものの、得た禄は一家がうるおうにはほど遠かった。

ところへ、関東へ移封して来たばかりの家康から、ふれが回って来た。

「関東の名家の子孫は申し出るように。よろこんで召し抱えるであろう」

関八州を秀吉から与えられ、俄に世帯の大きくなった家康は、急いで家来をふやす必要があったし、

一方では北条氏に追い散らされた人々をひろいあげる政治的効果も考えに入れての新規募集だった。
——これだっ！
太田家は、すぐにもとびつきたかった。が何たる不運か、かんじんの当主重正は、すでに佐竹に仕え、その供をして京都へ行ってしまっていた。
——あたら好機を。
母親が、がっくりしたとき、そばからお八が口を出した。
「私が行ってみましょうか」
「え、お前がだって？」
「ええ、おふれには、必ず男に限るとは書いてありませんもの。お城では、きっと女手も御入用ですわ」
「そうだねえ」
母親もうなずいた。
「粥をすすするのがやっとなんだからねえ」
「それよりはお城で拭掃除して、御馳走をいただいたほうがいいと思うけど」
念のために系図をふところに、彼女は江戸に出ることになった。
それからまもなく、ふらりと奥向きにやって来た家康が、お八に眼をとめた。
「ほほう、そなたが、道灌の……」
色白の頬、つぶらな瞳、それを蔽う長いまつげ。田舎育ちにしては垢ぬけした容貌が、彼の心をそ

そったのはもちろんであろうが、こうつぶやいたところを見れば、系図にも思いがけない効力はあったのかもしれない。

家康に抱かれたとき、お八が思ったのは、これで一つの儀礼が終わった、ということだった。いまで母子をおびやかしつづけて来た貧しさと訣別する儀礼が、である。

夜中にめざめたとき、お八はもう一度口の中でつぶやいた。

——ああ、これで大丈夫。

からだを思いきりのばし、寝がえりをうつと、今度は猫のように背中を丸めて眠った。それが気持ちのよいときの、お八のくせだ。その夜のお八の眠りは、甘ったるい夢におぼれて大いびきをかいている家康のそれよりも、さらに安らかだった。

が、安心するのは、ちょっとばかり早すぎたかもしれない。背中を丸めて子猫のように眠りこけているお八は気づいてはいなかったが、彼女を待ちうけていた運命は、それほど調子のよいものではなかったのだ。

二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com